

# 高野光男先生・いい先生

徐 揚

- 一、 動機
- 二、 インタビュー内容
- 三、 結論
- 四、 終わりに

## 一. 動 機

- 「将来何になりたいの？」
- 「学校の先生になりたい！」
- 「どんな先生？」
- 「いい先生！」
- 「いい先生ってどんな先生なの？」
- 「・・・」

「いい先生ってどんな先生？いい先生ってどんな先生？いい先生ってどんな先生？  
誰か教えて・・・・・・・・」

教師になることは私の小さい時からの夢である。なぜ教師になりたいかという、それは小学校時代にすばらしい先生と出会ったからなのだ。あれ以来、その先生は私にとってアイドルみたいな存在になった。誰でも自分のアイドルになってみたいと思うのと同じように、私も教師という職業に心を奪われた。今まで生徒の立場でいろいろな先生に教わってきて、ほとんどいい先生に恵まれたことは今でも感謝している。だが、「悪い」先生に遭って、苦しんでいた日々もなかなか記憶から消えない。だから、良くも悪くもすべて体験してきた私は今度教師になったら、絶対「いい先生」になれると信じていたが、いったいどんな先生が「いい先生」なのかと問われたら、やはり答えに詰まって答える言葉がない。「いい先生」というのはあんまりにも曖昧な表現で、こんな幼稚な教育観でいい先生になろうとしてもなれないのではないかと私は自信がなくなってきた。決して夢を捨てたくない、その答えを見つけなければならない。

——「自分が魅力的だと感じる人物にインタビューを下さい。」

——「魅力的？難しいね。あ、私、昔嫌いだった文学の授業が今大好きになったのはなんでだろう。そう言えば、日本にきてから文学の先生に魅力を感じているのではないか。あの先生はいい先生だね。」

高野先生は私の総合・文学の授業を担当している。いつもにっこりしていて、やさしい先生である。シャツにネクタイのかっこうはとても先生に似合い、声も穏やかな方である。私は、今学期から高野先生の授業に出てきて、いつも楽しい文学時間を過ごしてきた。

授業では、先生のいつも元気いっばいで、詩でも朗唱しているような声を聞いて自分も力を注がれたようになった。時には、私たち留学生に理解しがたい言葉でも出てきたら、高野先生はいつも口だけでなく「全身運動」してイメージしやすいように説明してくれる。例えば、この前「がにまた足」という言葉がでたが、これを私たちに理解させるために、先生は自ら「がにまた足」で教室を歩いた。歩きながらなぜ昔は日本人がそんな歩き方をしなければならなかったかも説明してくれた。私たちはあのへんな歩き方を見て笑いながら言葉も言葉の文化背景も知らず知らずのうちに覚えた。

高野先生はあらゆる機会を利用して、私たちの文学の素養を育成するように工夫している。授業で一人の学生は日本で見た印象的な光景が「一人で居酒屋で酒飲む」ことだと言い出したら、先生は明治の歌人・若山牧水もそれについて歌を残しているよと教えてくれた。

### 白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は一人で飲むべかりけり

先生目で見ている世界は詩的な世界だとさえ私は思うようになった。

また、先生の授業でいつも感じることは先生のやさしい心遣いである。授業では毎回プリントを教材として使っているので、プリントを無くさないように先生は自分でファイルストッパーを買って配ってくれた。これはたいしたことではないと思われるかもしれないが、私はそのファイルストッパーを手に入れた瞬間はすごく感動した。これからも、それを使うたびに先生のやさしさが感じるだろう。

本当に「いい先生」だといつも感嘆する私は、ふと自分の問いを思い出した。自分が「いい先生」に魅力を感じているのではないか。その魅力がどんなものであるかをわかったら、「いい先生」の答えも少しでもわかるのでは・・・

「魅力」というものはもちろん人によって違うが、高野先生のインタビューによって先生自身の魅力を探し出したい。高野先生の魅力は果たしてどんなものであるか、どんな人生の道を歩んできてやっと今日の先生になれたのかを探してみたい。そのうち先生の「魅力」もわかってきて、私自身もずっと探してきた答えを見つけられるかもしれない。

## 二. インタビュー

### 1. いままで

❖ 早稲田大学を卒業したら直接に先生になったのか？

(先生にインタビューする前に、先生のことについてまったく知らなかったもので、まず簡単な履歴みたいなものを聞くことに)

※ 早稲田大学教育学部卒業したら、茨城県のある私立高校の国語先生に就職した。主に二、三年生を対象にして、三年間教えた。そして学校を辞めて早稲田の国語国文学専攻科に進学した。

❖ なぜ大学に戻った？

三年生の授業が受験勉強中心だった。受験指導ではなく、本格的な国語教育をやりたいから。

❖ 本格的な国語教育って何？

自分にもこの問題を問い詰めていたので、さらに研究したい。

卒業後、東京都教員採用試験で合格して、ある養護学校に勤めた。一年後辞めて工業高等専門学校に就職し、今まで続けてきた。

❖ なぜ辞めた？やはり養護学校がつかった？

違う。知恵遅れの子や、体の不自由な子の成長を自分の目で見えてきて、非常に充実感のある仕事だった。ただ自分が本来やりたかったのは研究をしながら授業をやることなので、養護学校では子供たちの世話など時間いっぱい取られてなかなか研究が進められなかった。ちょうどそのとき、誘いがあった。「うちでは研究もできますよ」という話だったので、養護学校を辞めたのだ。

そして6年前から、毎週一日研究日に早稲田で授業するようになった。

### 2. 最も役に立たない文学とかげのある高校先生

❖ なぜ先生になろうと思ったのか？

(自分が動機でも書いているように、誰でも職業を選ぶ背後に必ず何かの原因があると思う、その原因は人によって違うから、高野先生には必ずなんかのエピソードがあったと直感していた....)

※ 今もたぶんそうだが、十代の私は特にひねくれ者だった。

中学校の頃は建築家になるつもりだったが、次第に文学に惹かれるようになった。どんな時代もそうだと思うが、若者にとっては世の中・社会というものはちっとも魅力のない、エロスに欠けるものだね。頭のいい友人たちはあらゆる価値が相対的なものに過ぎないことを見抜き、それならばこの世の中を動かす経済価値を「信仰」するに如かないと、いい

大学に入り、大企業に就職することだけを目的に生きているように私には見えた。

それに対して、私は世界には絶対的な価値があるはずだと考えていたように思い出される。今から思えば、ある意味で「倫理的」だったのだといえると思う。そうした「倫理」を、私の場合は文学に求めたような気がする。

その頃、私が読んだ小説の中で最も魅力的だったのが夏目漱石、とりわけ「こころ」という作品だった。「こころ」の先生は、叔父に裏切られ、財産の一部を横領されてしまう。先生は叔父がとりつかれた「金」の支配に対して、「働かない」ことで、自らの「倫理」を守ろうとしている面がある。この点は「それから」や「門」でも同じだね。

ところで、漱石の魅力の一つに小説世界の中に「師弟関係」が構造化されていることがあると、当時も直感的につかんでいたし、今でも思っています。漱石の読者は、小説を読むことによって「漱石」と師弟関係を結ぶことができるのではないだろうか。私は、そんなきっかけで文学に惹かれるようになり、三島由紀夫の『豊饒の海』の主人公、松枝清顕が社会で最も役に立たないという理由で文学部に入ったように、私も教育学部の国語国文学科へと入学したのだった。高校の国語教師 T 先生に漱石の面影を重ねたり、芥川龍之介や堀辰雄、立原道造が出た学校であったということがさらに文学への思いに拍車をかけたということもあると思う。

先生は教師になった理由というより、文学との出会いを語ってくれた。

私も前から小説を読むことが好きで、日本語を勉強し始めたら、日本人作家の作品も読むようになった。中には、特に芥川龍之介や太宰治が愛読で、彼らの作品はほとんど読んだ。夏目漱石はわずかの二、三部しか読まなかったが、ちょうど「こころ」も読んだ。だから、高野先生の言っている「倫理」や「価値」そして文学へ求めた純粋なものとはなんとなくわかるような気がする。

ここでは、高校の先生の話が出たので、ちょうど「高野先生にとって一番魅力的に感じた先生がどんな先生だったか」というのも聞きたかったのだ。

♥ その先生がどんな先生だった。

学問のある先生だけではなくカゲのある先生だった。お見合い相手の妹と駆け落ちしたという伝説が学校内に広まった方だった。まさに文学を教える先生だなと思った。

♥ 駆け落ちした先生が文学にふさわしいということ？

文学というのは反社会的行為だ。若者にとってやはり既成の道徳を反抗していくものだから、文学のスタイルにあこがれて本を読むことが好きになったことがあるだろう。すると、そういうカゲを抱えている人物が若者にとってすごく魅力的だよね。先生というのは真面目でいい人で悪いことをしないイメージがするが、僕にとって、既成のイメージを超えた先生のほうが魅力的感じた。

同感だ！私のアイドルだった先生もこんな「既成のイメージを超えた先生」だったのだ。小学校四年の時、あの先生はうちのクラスの担任になったが、私は先生のことをとっくに知っていた。「きれいでダンス上手、いつも大胆なファッションで、授業のやり方もほかの先生とまったく違い、学校の有名人先生」だったのだ。当時の80年代末の中国では、こんな先生はもちろんほかの先生の反感あるいは嫉妬の矛先になったことは少しもおかしくはない。しかし、先生がうちの担任になることにより、私の人生は変わった。

あの先生と出会う前に、私は臆病で恥ずかしがり屋で、何事をする前に、まず考えたのは「これは私なんかできるもんか」、自信というものは私にはぜんぜんなかった。こんな目立たない私だったのに、奇跡的に先生に選ばれて、全国小学生ダンス大会に参加し入賞したことは夢にも見なかった。あれからは私は別人のようになり、自信満々でしりごまず、人生のいろいろなことをチャレンジしながら成長してきた。たぶん、あの時、先生への感謝の気持ちは教師という職業への憧憬に転じたのかもしれない。今から思えば、先生は私をダンスの道へ導いてくれなかったら、六年前あえて中国文科系一番と言われる人民大学を志望した私もいなければ、一人で異国へ留学する私もいないだろう。

### 3. 一番の思い出

✧ 養護学校の時だった。そこで通っていた子供たちは自宅と学校の間をバス通学した。体が不自由だから、家のそばで乗せて学校まで来る。そうすると、彼らは社会との接点がなく、実社会とのコミュニケーションがなかったのだ。それで、もっと世界と交信しなければだめなので、手紙の書き方を教えた。手紙というものを通して見知らぬ世界とコミュニケーションする楽しさみたいなものを教えたら、ある女子プロレス好きな女の子が自分のあこがれの選手に手紙を書いた。「自分は体が不自由で、テレビでしか見ることができないがいつも応援しています。本当は会いたい」とかの内容の手紙を送ったら、何人かの選手たちは本当に学校に遊びにきてくれたのだ。いつもテレビで見た選手たちは学校の体育館でプロレスの演技をしてくれた。子供たちも感動したが僕も感動した。一人一人が置かれている状況に合わせてもっとも必要な言葉の力が何かを考えることが基本だから、そのとき僕が感じたのは**社会との通路を子供自身が見つけていかなければならないことだ**。手紙がその手段のひとつとしていいのではないかなと思って授業でやったら面白い展開になった。

これを聞いたら、私は、教師のひとつの役割としては生徒のためとなる一番必要な能力をつけることではないかと考えるようになってきた。そこには、まず生徒の状況を判断し、それに合わせる手段を考え出す教師自身の能力はもちろん大事だが、まずは、「**生徒のためを考える先生**」でなければならないことだね。

#### 4. 「個」

❖ 普段はどうやって学生を評価するか。  
✳ 中身を評価する。発表とかを通して自分の言いたかったことをちゃんと相手に伝えられたのかという表現力や、自分の発見など。また、一生懸命さや、意欲も。ただ一時的ではなく、長い物差しを持って生徒も見えていかなければならない。

❖ 生徒たちにもっとも教えてあげたいのは何？

✳ 周囲はどうであっても、「私」つまり「個」をしっかり持つこと。

❖ どうやって？

自分と違うタイプの人とも付き合うようにさせたりするとか。

❖ 「個」をしっかり持つことがなかなか難しい。それだけでは、ちゃんと持てるようになるか？

教師の守備範囲があるので、悲観的になるわけではないけど、できることは限界がある。ただ、その守備範囲の中で、作品の意味をわかるとか、言葉が使えるようになるとかののではなくて、しっかりした自分を持つため、あるいは、国家とか社会とかあるいは特定の集団の中に自己を埋没してしまうとか、国家の願いがそのまま自分の願いになってしまうようなことがないようにしっかりした認識力、言葉の力をつけるという大きな目標をもっている。もちろんすぐ実現するわけではない。

❖ どうしてそんなに「個」にこだわるのか。

それは、僕のひとつの歴史観がある。戦前の教育は集団の中に自己を埋没させるような教育だった。自分の冷静な判断がないと、すべて国家の願いになってしまったら、批判者のない国家が危うい。

最近のドラマでたまたま聞いたセリフだが、ずっとスイスで育ててきた十三、四歳ぐらいの女の子は、父親の仕事の都合で日本に帰国することになって、日本の学校に通い始めた。「学校は楽しいかい」と聞かれたら、「スイスでは、自分の言いたいことを何でも言えたのに、日本の場合はただほかの人と同じことを言うだけでいいのよ」と答えた。「なんでみんなと同じでいいのか」と私は聞きたくなる。町に出たら、見渡す限りルイ・ヴィトンのバッグばかりで、女子高生といえば、一様にダブダブ白いソックスをはいている。こんな光景を見た私は「個性ないな」と感じられるしかない。

日本人はずっと前から、「自己主張」しないとよく言われてきた（ステレオタイプに聞こえるが、「すべての日本人はそうではない」と筆者は意識しているから、ここで言うしておく）。たしかに、高野先生も言ったように、「集団の中に自己を埋没させるような教育」とつながるものである。ある意味で、私も「個」を大事にしているが、これはただ「個がないことは、つまらなくてバラエティに欠ける」と思うだけである。絶対先生の「批判者のいない国は危うい」レベルではない。常に民族危機を意識している先生のその足元にも及ばない

ような気がする。教育は国の元となり、教育者としての教師の役割はどんなに重大なものだろうか。この意味では、高野先生は、「一番役に立たない文学」を選んだが、「一番重責を担う職業」に携わっているのではないか。

## 5. 白い T シャツ

♥ 先生は生徒の人生を変えられると思う？

※ 変えちゃうから、気をつけなければならない。

実は、昔はそんなこと考えなかった。先生になって四五年の時、子供が真っ白な T シャツを着て、教師の好きな色で染めるのが教育だと思った。教師と子供がいろんなことをしながら、教師の自我と子供の自我を融合したりすることによって、純白な布に色を染めるイメージだったけど、いまはそれが怖いかなってあるいはそれができるかなって思うようになった。つまり、そのような色を染めるのがあなただ、あなたの責任で染めなさいと考えるようになった。

♥ つまり、生徒が自分で自分の白い T シャツを染めること？

そう、自分で選択して、あるいは、自分の責任をおいて、学校を通う中で染めていきなさい。教師にそめてもらうわけでもないし、国家や社会に染めてもらうわけでもない。

♥ また「私」をしっかり持つことだね。

自己責任だね。

♥ すべて自己責任だったら、教師の役割はどこにある？

ものごとや世界、現象を正確に冷静にありのままに見る力をつけさせる。

「変えちゃうから、気をつけなければならない。」という先生の話はわたしに大きな衝撃を与えた。私も昔の先生と同じように、子供が真っ白な T シャツを着て、教師の好きな色で染めるのが教育だと思ってきたのだ。今振り返ってみれば、自分がかつてなぜ苦しんでいたかは確かに「すきでもない色を T シャツに染めさせられた」からではないか。こんな教育観だったら、自分がどんなに「いい先生」になろうとがんばっても、結局生徒の T シャツに自分がいいだと思いつく模様を染めることになってしまっただけなのではないか。しかし、小学校の担任は確かに私を変えたのだが・・・

ふと何年前同窓会であの先生との会話を思い出した。

——「なぜほかの誰でもなくあんな私を選んだの？」

——「君の目を見ればわかるよ。誰よりも踊りたいと言っている目だったよ。」

そうだったのか。ダンスを選んだのは私自身だったのだ。

教師は生徒を変えるのではなく、生徒の選択を応援するものなのだ。

## 6. 差別とステレオタイプ

❖ 日本の学校問題としていじめ問題が特に目立つように見えるが、先生はこれに対しての解決方法は？いじめは一種の差別とも言えるね。日本人同士はもちろんだが、民族間、国との差別も存在することを否定できない。先生は留学生の授業も担当しているので、更に複雑になると考えられる。それぞれの文化背景を背負い、肌の色も言葉も違ういろいろな国からきた留学生たちの中に差別問題が生じることがおかしくないと思うが、こんな場合に教師の役割は？

※ まずは、歴史をきちんと学ばせること。また、文明の捉え方も。教材などを通して他国の文化を知るという文字レベルもひとつの方法だが、実際のレベルとしては、その国に行って、その国の人と接触することも大事だ。本来、民族差別の問題は不可避の問題のはずだ。留学生のレベルからいえば、民族差別的なレベルが関心の対象になるかもしれないけど、実は、日本の国内でも、日本人同士の差別問題ももっと根深くあるわけだ。日本の中の階層的な差別は厳然として残っている。それ自身はやはり解決しなければいけないが、なかなか解決できないような問題だ。

❖ 差別というのは、ステレオタイプ的な見方につながると思う。たとえば、日本人はこうだ、中国人はそうだなんかの言い方はよく聞こえる。

※ 留学生だけではなく、われわれの中にも同じ問題がある。そういう見方がまるきり外れているとも言えない。ひとつの傾向を示している。だから、国レベルでものを見ることは別に悪いことではないと思う。ただし、それはいつも、危ういものだ、すべてではないというもう一方の意識をもてるかが問題だ。たとえば、日本人は勤勉だというふうにとらえてもいいが、勤勉でない部分もある。文学のところをいうと、「三年寝太郎」というそれと矛盾する民話がある。日本人が勤勉だというのがいったいどっちが本当だろうと考えると、その日本人が勤勉だというのは、つまり近代のなかで作られた歴史的な産物であるとわかってくる。ただし、それは一方の事実でもあるわけだ。つまり大きくくくれるものと少数のそれと反するものを同時に持つ必要がある。

❖ これはつまり、ものの見方？

そう。すべての教育はどうかかわからないが、世界をどう見るかを教えるのだろうね。つまり、ものをどう見るかという勉強なのだ。教室で大事にしたいのは、やはりものをありのままに見るということだ。

話をしていくうちに、やはり前と同じようなものが出てきた。なるほど、ものをありのままに見るようになったら、ステレオタイプも自然になくなるわけだよね。また、「個」をしっかり持つことによって、まず自分を認めた上で初めて他人を認めることができるわけだよね。



### 三. 結 論

ずっと教師になりたい私は、今はさらに具体的になり、日本語教師になりたいと考えている。それは、大学で日本を専攻したからだけではなく、ほかの理由もある。

私は、日本語とめぐり会う前には、日本という国に対してあまり興味を持っていなかった。興味がないというより、むしろ軽い敵意のようなものを持っていたというほうが適切かもしれない。なぜかという、私は中国の大連市の出身で、あそこはもともと日本軍の占領地だったからだ。大連市には今でも戦争遺跡や日本式の建築がたくさん残っている。私のおばあさんとおじいさんは自ら戦争を経験してきたので、私は小さい時から耳に入ってきたのはすべて残酷な日本軍の話ばかりだった。そして、中国の映画を見たらわかるように、映画の中の日本人役はほとんどステレオタイプ化されているのである。だから、日本人をイメージすると、すぐ中国人（特に80年前生まれの人）の頭に浮かんできたのは刀を振っている日本軍人の姿である。だから、中国と日本は国交回復30年も迎えた今でもすごく微妙な関係である現状は否定できない。

というわけで、私は大学の日本語学部配置されたことで、最初のうちはすごく反発したものだ。長い間落ち込んでいて無理やりに日本語を勉強していたのだ。しかし、いやいやながら言葉や文法を覚えているうちに、日本の文化とも接するようになり、「知らなかった」日本像は出てきた。日本について「知らなかった」のだ。「知らなかった」ので、もっと「知りたい」という気持ちになった私は積極的に日本語を勉強し始めた。ある程度話せるようになったら、日本人の留学生と友達になったり、日本のドラマや映画を見たりしているうちに、日本の社会や日本文化は知らず知らずのうちに私の中で新たな展開を示してきたのだ。そして驚くことに、言葉が話せるようになったら、日本人の考え方もわかるような気がしてきた。昔とてもおかしく思ったことも理解できるようになってきた。

敵意や反発などはいつの間にか消えていった。今の私は日本に対して言葉には表現できない親和感を持っている。それは、いわゆる第二アイデンティティの確立過程とでも言えるのだろう。

だから、私は今度教師になったら、生徒自分に真実を探せ、個人個人の判断によって独自のアイデンティティを確立させたいと思う。とはいえ、どうやってこれができるかはまだまだわからない。だから、今回のインタビューでこの問題に重点をおいて高野先生を聞いたのだ。そしてインタビューが終わったいま、先生からヒントを得た。

独自のアイデンティティを確立には、まず、「自分」をしっかり持つことが大事だ。そのため、物事をすべてありのままに見る力が必要だ。この「力」はすべての問題を解決できる「鍵」みたいな存在となる力である。自分の生きている社会、この世界、周りの人々を自分の冷静な判断により、偏見でもなくサングラスでもなく、あるがままに見、あるがままに受けることができれば、差別もステレオタイプも自然になくなるものだとしている。話がうますぎると思われるかもしれないが、これこそわれわれが忘却されていた原点では

ないだろうか。

ここまで来て、私はもう一度自分に「高野先生の魅力というのはいったいどんなものなのか」を聞いた。その魅力は「本当に生徒のためとなることを考える」一教師としての姿にあると思う。「個」をしっかり持つことも、世界をありのままに見ることも、結局生徒のためとなるものである。そして、前の養護学校の例も、本当に生徒のためを考えたからこそ、あんなすばらしい思い出ができたのではないか。ついでに、例のファイルストッパーの件についても先生に聞いた。答えは以下のようなものである。

「今年度から前期は日本文学の「教養」を身につけることに主眼を置くようにしたが、こうした授業にふさわしいテキストはないし、また文学を専門に学んでいる学生ばかりではないので、できるだけ経済的な負担を掛けたくないという思いもある。書籍代は各人が母国に帰ってから必要となるものに集中して向けるのが、留学生にとって理想だろう。

それでプリントで講義を進めているが、問題はプリントが散逸すると試験にならないという点にある。従来、講義の初めに、プリントを閉じたものを配布したが、今年から講義内容を変更したため、今年度はそれが出来なかった。そこで、急遽、思い立ってストッパーをお配りした次第だ。」

というように、先生はこれがたいしたことではないように言っているが、行間に生徒のことを考える気持ちを匂わせている。私はこんな先生に魅力を感じたのだ。高野先生の魅力はもちろん独自の教育観に基づくものだ。私は先生の教育観からヒントを得たというより、同感を呼んだものだ。高野先生は私のなりたい「いい先生」の一人だ。たぶん、私は先生によって自分自身に潜在した「教育観」（と呼べるかどうか）みたいなものは引き出されたのかもしれない。では、「いい先生ってどんな先生？」もう答えられるのだろうか。

今の私にとっては、いい先生は、「何よりも生徒のためを考え、自分の意志を無理に生徒に押し付けるのではなく、生徒自分の冷静の判断による選択を応援する」先生だと考えた

い。いま、ふとインタビューで「なぜ教師になりたかった」という質問に対して高野先生の言葉を思い出した。

今の私にとって、「なぜ教師になったか」という命題はあまり重要ではないからかもしれません。教師はたえず「教師になりつつある」存在だ。教室での子どもたち・生徒・学生と出会い・経験を通じて、現在進行形として「教師たらん」とする存在とでも言うべきだろうか。

そうだね。将来、私の教室で何が起こるかは今のうち想像のつくものではない。教師は「教師たらんとする」存在で、「いい先生」というのもこれから私が教師になりつつ、探していくべき永遠的な命題だ。

#### 四. 終わりに

昨日、いろいろな授業で使っていたプリントや、プリントしたものを整理したとき、一枚の紙に目が留まった。あれは私が一番最初に書いた動機文だ。もう一度読んでみたら、あんまりにも形式に流れて少しも説得力のない文で笑ってしまった。あの時は、まだ日本に来てまもなく、誰かに魅力を感じる間がなかった頃だった。それにしても、気まぐれでもいい、カンでもいい、今思えば、よくすばらしい高野先生を選んだのではないかと自分も信じられないぐらいだ。そして、以上の十枚まで書けたことは当初の自分は思ってもみなかっただろう。

この三ヶ月間は、いろいろな失敗を体験してきた。書いた文に自信満々で授業に出たら、批判されて認めてくれなかったとき、他の人の書いた文に対してどんなコメントを出したらいいかわからなくて鋭く言うと相手を傷つけ、いいかげんに言うと無責任になってしまい、大変困ったとき、よく日本語で表現できなく、本当に伝えようとしたことがなかなか相手に届かないとき、難関をなかなか乗り切れなくて何時間も一字書けずパソコンの前に座り込んだとき、自分を「隠す」ことに慣れていたが、ここでは絶えず「徐さんにとっては？徐さんの意見は？」と追われて、やむを得ず自分が自分と向き合ったとき、今週はやっと一区切りついたと思いきや、来週はすぐ目の前に…本当に辛かった。

人間は窮地に追い込まれると、立ち上がって戦うかそのまま放棄して沈没してしまうかのどっちかを選択するものだ。しかし、この授業は「窮地」でもないし、放棄しても別に沈没するわけでもないのだから、「やめようかな」と思ったことはないわけでもない。では、どうして最後まで残ってきたのだろうか。

たぶん、私は自分を表現したかったのだ。そして表現した自分をみんなに認めてほしかったからだ。自分のことだから、自分がわかっているだけで、何とかの形で表現できないと、相手は自然にわかってくれるわけではない。こういう「何とかの形」というものは「言語」だ。言語の重要さは私がこの授業を通して再認識することができた。

人間は社会で生きていけるために、絶えず他人とのコミュニケーションが必要である。コミュニケーションをよく取れるために、言語をうまく利用して自己表現をしなければならない。では「自己表現」というのは、いったい何を表現するのだろうか。自分の感情？立場？思考？いや、そのすべてだ。自分の中にあるほかの誰とも違う個人専有の「文化」を表現するものである。私だけではなく、人間誰でも潜在意識のどこかで自己の文化を言語を通して表現したがつているのではないだろうか。いまになって、この授業はなぜ「言語文化」なのかについては、少しわかったような気がしてきた。

日本に留学来て三ヶ月経った。日本に暮らすことは私にとって日本を自分の目で確かめる機会である。高野先生の言っているように、ありのままの日本を見てありのままの日本を受けてそして、日本で見たこと聞いたことを私自分の判断によって冷静に考えたい。この意味では、日本に暮らすことは、従来私についてきた日本に対してのストレオタイプを

剥がしていく過程とも言えようか。すでに四分の一過ぎたが、あとの四分の三も大事にしていろいろな「個」と接触して日本での生活を充実していきたい。

思い出せば思い出すほど、記憶は縛られずに遠いところに漂っていった。

「先生と生徒」関係の日野さんと高さん教室に会って思わず「あっ」とびっくりした表情がとても面白かったです。Wingさんが中国語話せるかなと思いながら先に中国語で声をかけてくれてうれしかったです。林さんの名前は初めて聞いたとき、「逸菁」って美しい名前だなと感嘆しました。初めてメーリングリスト使って自己紹介はちゃんと届いたのかなと心配しましたが、「大丈夫ですよ。オレンジ色のセーター着てショートカットのあれですね。すぐわかったわよ」と米田さん、言ってくれましたね。中川さん、初対面のときから「友達になりそうな人だ」と感じましたわよ。あとでレポートを読んでちょっと人間関係で苦しんでいるみたいで、びっくりしました。そして三代さん、最初はきびしそうだと思ったが、やはりきびしかったです。( ^ー^ )

私のレポートは、いやこれは私だけのものではなく、クラスの皆さんとの共同結晶だといふべきです。出来上がった今はすごい達成感を感じています。これを自分の誕生日プレゼントとして自分に贈りたいと思いますが、皆さん、よろしいでしょうか。

2003年7月14日

日本・東京・早稲田・誕生日  
レポート完成